

紙版 ハコブネ×ブックス vol. 4

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐwebサイトです。



わたしがいどんだ戦い 1939年

The War I Finally Won.

2016年ニューベリー賞オナー受賞作

作者 キンバリー・ブルベーカー ブラッドリー
翻訳者 大作道子
出版社 評論社
発行 2017年8月
ISBN 978-4566024540



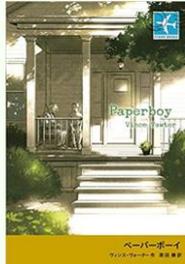
特集

ニューベリー賞受賞作 という太鼓判



はるか海を越えて日本で翻訳刊行されていることだけでも、選り抜かれた秀逸な作品だろうという予見を与えられているとすれば期待値は高まります。そして読み終えた後に、やはり期待通りの作品だったと裏切られることがない。それがニューベリー賞受賞作です。アメリカで毎年、最も優れた児童書に与えられるニューベリー賞。1922年に創設された伝統ある賞の受賞作は、かならずしも日本で刊行されるわけではありませぬ。何十年も経ってから、突然、過去の受賞作が刊行されたり、佳作(オナー)だけ刊行されている年度もあります。つまりニューベリー賞やオナー受賞作を豊かな日本語で読めることは僥倖であつて、もし翻訳刊行されたならラストで読んでおくべきものなのです。ということと、面白い海外児童文学作品を読みたいと思ったら、まずはニューベリー賞受賞作から、というおすすめで。

生まれつき足に障がいがあったて歩くことができず、家の中を這って暮らしている十四歳のエイダ。母親は娘を虐待し、外に出ることさえ禁じていました。1939年、エイダの暮らすロンドンではドイツ軍の空襲に備えて、子どもたちの疎開が始まっています。母親から逃れる好機を得たエイダに待っていたのは、田舎の田園地帯での新しい生活です。エイダを預かってくれたのは、少し気難しいところのある独身女性スーザン。エイダはずっと蔑まれて育つたために素直に気持ちをあらわすことができず、スーザンと不自然なコミュニケーションしかとれません。辛辣な言葉とは裏腹に次第にひかれあう二人の姿は、ユーモラスであり、どこか切なさもあります。普通の暮らしの第一歩をこの場所で恐る恐る踏み出すエイダ。そんな彼女の「戦い」を見守る物語です。



ペーパーボーイ

Paperboy.

2014年ニューベリー賞オナー受賞作

作者 ヴィンス・ヴォーター
翻訳者 原田勝
出版社 岩波書店
発行 2016年7月
ISBN 978-4001664114



野球が好きでナイーブな少年が友人の代わりに新聞配達をすることになった夏休みの一ヶ月間。ボールを投げるのは得意だから新聞の投函はできるけれど、吃音があつて自分の名前を口にするこさええ難い彼は。そんな少年が仕事を通じて色々な人々と触れ合い、これまで知らなかった世界と出会っていきます。どこか訳ありの「大人の女性」や、人生を見通す目を持った「賢明な老人」。世の中のダークサイドに「不穏な男」。両親を違った目で見るこになったり、大人たちが経てきた人生に思いを馳せることで彼は成長していきます。1959年のメンフィス。アメリカの田舎町の文化、風俗が活き活きと描かれ、オールドデイズが呼び覚まされます。あの時代を生きた清新な少年の時間がつなぎとめられた魅力的な作品です。



月の光を飲んだ少女

The girl who drank the moon.

2017年ニューベリー賞受賞作

作者 ケリー・バーンヒル
翻訳者 佐藤見果夢
出版社 評論社
発行 2019年5月
ISBN 978-4566024632



年に一度、赤ん坊を魔女のいけにえに差し出さなければならぬ風習のある町。人々は嘆き悲しみながらこの儀式を執り行っていました。ところが魔女は、どうして人間は森に赤ん坊を捨てていくのかと真意を計りかねていたので。自分に捧げられたいけにえとは知らぬまま、赤ん坊を手厚く保護して、幸せに暮らせるようにと里親を探す魔女。ところがある年、保護した赤ん坊にうっかり月の光を飲ませて魔力を与えてしまった魔女は、その子にルナと名付け、自分で育てることになります。魔女の名を利用して人々を支配しようとする町の長老たちと慈悲深い魔女。赤ん坊を救い出すために魔女を殺すことを決意する青年。ユニークな登場人物たちが織り成す愛に満ち溢れた物語。既存の魔女物語を覆す意外な展開に驚かされる奇想のファンタジーです。



その年、わたしは嘘をおぼえた

WOLF HOLLOW.

2017年ニューベリー賞オナー受賞作

作者 ローレン・ウォーク
翻訳者 中川はるの 中井川玲子
出版社 さ・え・ら書房
発行 2018年10月
ISBN 978-4378015262



その年、わたしは嘘をおぼえた、という十二歳の少女アナベルの告白から始まる物語。1943年の秋。オオカミ谷の近くの農村に暮らすアナベルを悩ませていたのは、同じ学校に通うベティという粗暴な少女でした。ベティに脅されたアナベルを助けてくれたのは、いつも銃を抱え近所をうろついている男性、トミー。かつての戦争で身体と心に深い傷を負ったトミーには奇行癖があり、周囲から奇異な目で見られていました。狡猾なベティによってトミーはあらぬ罪を着せられ窮地に追い込まれます。自分を戦争の英雄だとは考えられず、罪の意識に震えながら生きているトミー。誰も近寄ろうとしなかつた孤独な魂を知り、彼のために、嘘をつくことで真実を求めたアナベルの苦い勇気が胸を打ち、深く突き刺さり続けます。

特集 ニューベリー賞オナー受賞作



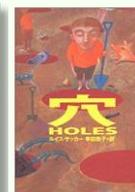
あのお馴染みの名作もニューベリー賞受賞作です。他の受賞作のレビューも取り揃えておりますので、サイトの特集をご覧ください。



テラビシアにかけの橋 1978年受賞作



のっぽのサラ 1986年受賞作



穴 1999年受賞作

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.4

2019年9月1日発行 ● 発行人 きむらともお

事務局系社員。趣味で児童文学紹介サイト ハコブネ×ブックス(非営利)を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、諸々を受賞。



Twitter 連携しています。

© tomoostretch